

第4節 工夫したり、協力したりし一緒に活動する楽しさを味わう

幼児一人一人が自己を発揮し、「楽しい。やってみたい。」という気持ちで遊びに取り組んでいくと、友達の存在に気付き、友達の遊びに興味をもったり、一緒に遊びたいという思いになったりする。時には、思いがぶつかり合うこともあるが、友達と一緒に遊ぶことが楽しいと感じ、力を合わせて一つのことに取り組む姿、友達と一緒に活動する楽しさへとつながっていく。

ここでは、2年保育5歳児の実践事例として、友達と一緒に遠足を再現して遊ぶ姿（事例1「〇〇グリーンセンターここから入りますよ」）、友達と力を合わせて一つのものをつくり上げる姿（事例2「ぞうの鼻ってどこにあるの」）、一つの目的に向かって友達と協力したり、考えたりして遊びを進める姿（事例3「きび団子もらったお礼にしたら」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P60～P63）

1 幼児の実態（2年保育 5歳児クラス 27名）

年長組へ進級と同時にクラスが変わり、新しい友達関係の輪が広がりつつある中、遊び方もダイナミックになり、友達のしていることに興味をもって関わっている姿が見られる。しかし、自分の思いを強く通そうとしたり、思いをうまく、言葉にして相手に伝えることが難しかったりすることから幼児同士のいざこざも見られる。その際、教師は、幼児の思いを聞き、共感したり、代弁したりして、幼児が自分の思いを自分なりの言葉で相手に伝えられるように配慮している。

本学級は、明るく元気いっぱいの幼児が多く、好奇心旺盛で新しいものや遊びに興味を示し、友達や教師が楽しそうにしているとそばに来て様子を見て、ちょっとした変化に気付き声をかけたり、手伝ってあげたりする姿が見られる。

2 指導のねらい（事例1、2、3）

- ・友達と考えを出し合いながら、遊びを進める楽しさを味わう。
- ・友達と認め合い、一緒にやり遂げた満足感をもつ。
- ・友達と遊び方を考えたり工夫したりしながら一緒に遊ぶことを楽しむ。
- ・目的に向かって友達と協力したり工夫したりしてやり遂げた喜びを味わう。

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2節の3(3)「協同性」]

- ・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、

自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2節の3 (6)「思考力の芽生え」]

4 内容

- ・ 友達の考えを聞いたり、自分の考えを話したりして遠足を再現して遊ぶ。(事例1)
- ・ 共通の目的をもって互いのイメージを出し合いながら、友達と力を合わせて一つのものをつくり上げる。(事例2)
- ・ 一つの目的に向かって友達と協力したり、考えたりして劇遊びをする。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・ 興味や活動意欲の高まりを受け止め、多様な動きが体験できるような環境を工夫する。
(事例1)
- ・ 幼児が相談したり、協力したりできるよう、十分な時間を確保し、見通しをもてるようにする。(事例1、2)
- ・ 友達やクラス全体で、創作や表現を楽しめるような活動を取り上げ、同じ目標や目的に向かって取り組む満足感を味わい、共同する楽しさや充実感を味わえるような機会を設ける。(事例3)
- ・ 幼稚園での経験が意欲・自信へとつながっていけるよう、様々な機会を通じて家庭に情報を発信し、連携をとりながら幼児がより豊かな生活が送れるようにする。
(事例1、2、3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 ○○グリーンセンターここから入りますよ！ (5月上旬)

前日、遠足で行った大きな公園(グリーンセンター)の絵を大きな紙に描き、それを遊戯室に提示した。

A児が、「先生、昨日のグリーンセンターを遊戯室につくろうよ。」と言ったので、教師が、「いいね。またみんなで楽しめるね。」と、A児の思いを受け入れた。周りにいた幼児も、「○○グリーンセンターだ！つくろう。」と同意し、遊戯室に○○グリーンセンターをつくることになった。さっそくアスレチックづくりが始まった。

ビーム(巧技台)を見つけた幼児が集まって来る。

A児「橋をつくろう。」

教師「どこにつくる。」

B児「あっちにつくろう。」

C児「ぼくも手伝うよ。」

皆で「せーの。」と声を合わせて巧技台を運び、橋をつくった。

A児「この橋とつながるように、ここは、はしごを置こうよ。」

教師「すごい、○○グリーンセンターのアスレチックみたいだね。」と、幼児たちが自分たちで遊びをつくり上げていくことができるよう言葉かけをする。

C児「長い滑り台もあったから滑り台もつくろう。」とA児やB児を誘い、重いはしごや滑り台、太鼓橋などを教師と一緒に運び、それらをつなげていった。すると、A児やC児が入口の所に何も無いことに気付く。

A児「ここは、どうしよう。」

C児「上からぶら下がるやつ、あったでしょ。あれつくろうか。」

D児「でも、上からぶら下げるところがないから、できないよ。」と話す。

A児は、以前大きな積木やソフト積木を使って迷路をつくったことを思い出し、

A児「ここは、入り口にして迷路にしよう。」と積木を並べて迷路をつくる。

E児「ぼくは、門をつくるね。」

とソフト積木を積み上げ、通ることができるように門をつくった。教師はその様子を見守りながら、

教師「そうだね。グリーンセンターの大きな門通ったね。」と幼児たちの考えに共感する。幼児たちは満足そうにうなづく。

A児「ここが入口ってわかるように看板つくろうよ。」と看板をつくった。

B児「〇〇アスレチックができた！」

教師「素敵な門だね。ここが入口ってすぐわかるね。」と周りにいた幼児にも知らせると、「本当だ。僕も入れて。」と仲間入りしてきた。

A児「〇〇グリーンセンターここから入りますよ。」

門に入ると、嬉しそうに自分たちでつくったアスレチックで遊び、前日の遠足を思い出している。

⑨ 〇〇には、幼稚園名が入る。

○事例1に対する評価

(幼児理解)

遠足で見たことやしたことを、これまでの経験を生かして再現し、そのプロセスにおいて、友達に相談したり協力して作業したりすることを楽しんでいる。再現したことから、更に工夫を重ね、共感した幼児と共に遊びを広げている。

(教師の指導・家庭との連携)

- ・一人一人の幼児が自分の考えや感じたことをのびのびと話したり、活動に進んで取り組んだりしていけるように、今まで築いてきた信頼関係を基盤にそれぞれが思いを出し合う様子を見守る。また、幼児が自ら周囲に働きかけ、自己を發揮していけるように共感したり認めたりするなどの援助をしていった。
- ・家庭でも行きやすい場所として、市内にあるグリーンセンターを園外保育の場所とした。

(2) 事例2 ぞうの鼻ってどこにあるの。(11月上旬)

動物園への遠足後、幼児たちは動物を作り始めた。

E児「『ぞう』をつくりたいね。」

F児「いいね。大きいのをつくろう。」

と、自分のイメージに合った大きさのダンボールを探して組み合わせたり、積んだりしながら体と頭を作る。鼻を作ることになるが、それぞれの思いが一つにならず、

進まない。教師が、「どんな『ぞう』にしたいの。」とたずねる。

G児「みんなで遊べるのがいいよ。」

F児「いいね。」

H児は「でも、どうやって。」と困っている。

教師「どういうふうにしたいの。」

E児「滑れるようにするのはどう。」

I児「鼻の所を滑り台にするといいんじゃない。」

F児「大きいダンボールを持って来て滑り台をつくろうよ。」

J児「でも、段ボールじゃ壊れるよ。」

G児「そうだよ。折れて壊れるよ。」

教師「そうか。みんなが乗っても壊れない滑り台あるかな。」

F児「そうだ。遊戯室でやる滑り台、あれをもってこようよ。」

E児「それ、いいね。」と口々に話す。

教師は幼児の様子を見守り、

教師「みんなで取りにいこうか。」

と遊戯室にある滑り台（巧技台）を一緒に取りに行く。

E児「どこにつける。」

F児「年少さんでも滑れる所にしようよ。」

などと話をしながらE児はぞうの顔の横に滑り台を置く。

F児「顔の横に鼻があるのは変だよ。」

G児「じゃあ、後ろはどう。」

H児「体に鼻はないよ。」

教師「ぞうの鼻ってどこにあったかな。」と声をかける。

F児「ぞうの鼻は顔の前にあるよね。」

E児「じゃあ、ここだね。」

とE児とF児は、滑り台を顔の前に置く。「いいね。本物のぞうみたいだね。」と体、頭、鼻とつながったぞうを満足そうに見ている。

G児「そうだ。ここに穴あけてここから通れるようにすれば。」

D児「いいね。ここを滑れるようにしよう。」

体から頭を通り、鼻を滑ることができるぞうが完成した。ぞうが完成すると、「たくさん動物をつくって、ぼくらの幼稚園を動物園にしよう！」と、次の動物を作る相談を始めたり、材料を集めたりする幼児の姿が見られた。

○事例2に対する評価

（幼児理解）

- ・友達と共通の目的をもって動物をつくる中で、それぞれいろいろな友達と関わり、考えを出し合ったり相談したりしながら進めていた。時には、ぶつかり合う場面もあったが、幼児なりに折り合いをつけたり譲り合ったりしていた。友達と一緒に作り上げる楽しさを感じている様子が見られた。
- ・「ぼくたちの幼稚園を動物園にしよう。」と遊びや具体的なイメージが広がり膨らんでいった。これまでの、段ボールを使った遊びや、段ボールを活用しての制

作等の経験により、友達と一緒に考えを生み出し、遊びが広がっていった。

(教師の指導・家庭との連携)

- ・ 幼児が考えを出し合って遊びを進めていく場面と、幼児の思いを教師が汲み取って実現していけるように環境を整える場面との見極めは難しい。それぞれの幼児の考えを受け止め、そのことを言葉にして幼児に伝えることで、幼児は更なる考えを生み出した。幼児一人一人の思いや考えをじっくり聞き、理解したり共感したりしていくことが大切である。
- ・ 友達と一緒に、一つのものをつくり上げる面白さや満足感を味わえるように、幼児の目的達成のための教師の援助の在り方を工夫していくことが大切である。
- ・ 幼稚園の行事の中で、保護者参加の親子動物園遠足は、親子での活動となっている。動物に触れるなどの自然との関わり方を保護者に知らせるなどして、幼稚園での生活が家庭でも生かされるようにしていく。
- ・ 降園時の機会や学級だよりなどを活用して幼児の遊びの様子や頑張っている姿を伝える。ここでは、親子で行った動物園遠足が、遊びの中で再現されている様子を伝え、保護者が幼児と体験や感動を共有することで、幼児の気持ちや言動の意味に気付いたり、幼児の発達の姿を見通したりすることにつながる。

(3) 事例3 きび団子をもらったお礼にしたら (2月上旬)

学級で教師が「ももたろう」の素話をする、話に興味をもちイメージを膨らませながら、途中の言葉や歌を一緒に口ずさみ始める。話を楽しんでいると、みんなで「ももたろう」の劇遊びをしようということになる。

幼児が劇をつくり上げていく中で、気付いたことや考えたことを友達同士で話し合う。さくら組の「ももたろう」の話には、どんな役をつくらうか、どのような話の筋で話を進めていこうか、など、何度も話合う日が続く。

ある日、役を決めていると、役ごとに得意技を入れていこうということになった。「ももたろうは、鬼退治に行く前に技をしよう。」「そうだね。」「おじいさんとおばあさんは、最初だね。」などと相談をし、劇遊びを進めていく。

I 児「犬役の得意技はやらなかったね。」

犬役の子がどこで得意技を見せたらいいかわからず困っている。

教師「そうだね。どこで見せるのがいいかな。」とクラス全体に投げかけると、

J 児「ワンって言ったら、得意技入れたら。」

I 児「それ言った後だと、得意技のダンスするのが難しいよ。」

K 児「じゃあ、帰るときは。」

L 児「帰るときは、すぐ音楽かかるし・・・」

と、それぞれの幼児が意見を出す。なかなか決まらずにいると、

M 児「きび団子をもらったお礼にしたら。」

I 児「それ、いいね。」

J 児「すごくいい。」

I 児「犬の得意技をいれて、もう一回やろうよ。」

「いいね。」「やろう。」「楽しみ。」という声が次々と聞かれ、教師は「ますます、素敵なお話になるね。」と、声を掛けた。

○事例3に対する評価

(幼児理解)

一人一人がアイデアや思いを出しみんなで劇をつくり出す楽しさを感じている様子が見られた。劇遊びという活動の中で、自分の思いや考えが友達や教師に受け容れられたり、互いの思いを認め合ったりしながら、友達と一緒に協力して一つのものをつくり上げていく経験が自信へとつながっていく。「それ、いいね。」「すごくいい。」と認め合う年長2月という時期らしい成長が感じられる。

(教師の指導)

- ・学級全体で課題を共有できるように教師が意図していくと、幼児は更にいろいろな友達に関心をもつようになり、個々の思いを出し合えるようになっていった。今まで築き上げてきた互いを認め合える信頼関係を基盤に、幼児の思いや考えをみんなで話し合えるように場を設けたり、幼児同士が互いに認め合えるように教師が援助したりしていくことによって、同じ目的に向かって考えを出し合う楽しさや達成感を味わうことができた。
- ・劇遊びに自信をもって取り組むようになると、「お家の人に見せたい」という声上がる。そのことを想定し、劇遊び参観の日を設定しておく、幼児は、「お母さんに見せるからもっと素敵にしたい」と更に友達と協力して、劇遊びに取り組んだ。
- ・幼児たちの思いを認め、劇をみんなでつくり上げていく満足感を得たり、困ったことをみんなで解決したりした経験を自信へとつなげるようにした。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

- ・教師は、幼児がいろいろな友達と関わり、友達の思いを受け止められるように、共感したり代弁したりしていく。
- ・幼児同士が共通の目的を実現しようとする過程を丁寧に捉え、新たな交友関係を広げていけるよう、幼児が思いを伝え合っている姿や友達の考えを受け容れる姿を認めたり、幼児の思いを仲介したりして、同じ目的をもって遊べるように援助していく。

(2) 長期の指導計画の改善

- ・幼児が自分から興味をもって環境に関わることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験をする中で、幼児が興味や関心のある活動にじっくりと取り組むことができるように、時間・空間・仲間を保障していく。
- ・たくさんの友達と出会うきっかけが、新しい関係性につながっていく。多様な関係性を育てるため、大勢で遊びを展開していくことができるよう、計画的に環境を構成し保育を展開していく。